Osaka University Knowledge Archive

Title	明治・大正期の高等教育における工芸
Author(s)	藤田, 治彦
Citation	美学. 1999, 50(3), p. 67-67
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/26616
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

The Japanese Society for Aesthetics

明治・大正期の高等教育における工芸

藤田治彦

手づくりの一品制作のイメージの強い「工芸」と、同一製品の大量生産の基本ともなる設計行為である「意匠、図案」との関係は、明治の初めから密接であり、しかも、芸術(美術)博物館創設など、近代日本の美術制度全体にもかかわる性格のものであった。

一八七〇(明治三)年に来日し、日本政府の鉄道建設技師長となったイギリス人技師、モレルが提出した建築局(工部省)設置の建議に含まれている「工芸館」は、サウス・ケンジントン博物館を念頭においての提案であった可能性が高い。同時期の文書と推定される「高橋由一油画史料」中にある「工芸館」も、同館およびそれを参考に西欧の主要都市に次々と設置された「工芸博物館」の類をさしている可能性がある。デザイン史研究の先駆者ペヴスナーが、第二次世界大戦前後に『美術のアカデミー』その他で紹介することになる、近代デザイン教育に先駆けたイギリスの官立デザイン学校やオーストリア芸術産業博物館などの組織と活動は、明治初年の日本にすでに伝わっていたのである。

ただし、当時「工芸」という用語が一般化していたとはいえない。殖産興業政策に影響を与えたドイツ人ヴァグナー(ワグネル)は、一八七三(明治六)年のウィーン博を機に欧州各地の博物館を調査、一八七五(明治八)年に「百工及百工上芸術博物館ニ付テノ報告」「東京博物館創立に付ての報告」をまとめるなど、日本の博物館創設史上でも重要な役割をはたした。佐野常民の養子、浅見忠雅の訳になるこの「百工芸術」は現在の「工芸」に近い言葉で、両報告における「工芸」はむしろ"Technology"に近い。フランスの組織に関する箇所での「百工芸術」は"Beaux-arts appliqués à l'industrie"に対応し、オーストリアの博物館についての箇所での「芸術及ビ百工博物館」は"Museum für Kunst und Industrie"に対応している。黒川真頼が『工芸志料』を刊行するのは一八七八(明治十一)年、佐野を会頭とする竜池会が『工芸叢談』を創刊するのは一八八〇(明治十三)年のことである。

「工芸」の語は工業教育で用いられるようになる。一八八五(明治十八)年、東京大学に一時、工芸学部が、一八八七(明治二十)年開校の金沢区工業学校には美術工芸部が設けられ、東京職工学校は「工芸教員」養成を目的のひとつとした。「工芸」は"Technology"だったのであり、より美術的な工芸は「美術工芸」とされたのである。一八九〇(明治二十三)年に次の変化が明らかになった。職工学校が東京工業学校と改称され、養成目的の一部である「工芸教員」が「工業教員」に変えられたのである。東京美術学校に当初計画の図案科を改称して美術工芸科が設置された年でもあった。「美術工芸」が確立し「工業」が一元的な高等教育へと向かうはざまに「工芸」は消えた。その後、さらに工業大学への道を邁進する東京高等工業学校で陶芸や図案を学んだ最後の人々のなかから、もっとも重要な工芸運動のひとつ、民芸運動の主導的実践者たちが輩出したのは偶然ではない。

NII-Electronic Library Service